

## 雷門

雷門の中央にある巨大な赤い提灯は、浅草の鮮やかなシンボルであり、浅草寺そのものとほぼ同じぐらい有名ですが、雷門の姿は長年のうちに大幅に変わってしまいました。

浅草寺の建物群は、平安時代（794 年 - 1185 年）に遡ります。時の国司、平公雅によって 942 年に寺が創建された時には、浅草寺の正門には提灯のようなものは何もありませんでした。この門は、風と雷の神である風神と雷神に因んで風雷神門として知られていました。風神と雷神の像は、門が 1635 年に現在と同じ寺の南側の場所に移転した際に門の両側に建てられた建物の中に安置されていました。しかしこの門は、そのわずか 4 年後に焼失しました。

1649 年に三代将軍徳川家光（1604 年 - 1651 年）がこの門を再建しました。この世代の門が初めて雷門と呼ばれるようになりましたが、この門も失われてしまいました。この門は合計で 4 回も焼失しました。1866 年の火事の後、今日まで残る雷門が再建されたのは、その約 100 年後でした。それまでの間にも様々な様式や材料を使って仮設の門が建てられました。おそらくその中で最も目立ったものには、東京を日本の首都に制定したことを記念して作られた門（1868 年）、日露戦争での日本の勝利を記念して作られたアーチ型の門（1905 年）、そして昭和天皇の即位を記念して作られた門（1928 年）が挙げられます。

現在の雷門は、現在のパナソニックになる電化製品メーカーの創業者、松下幸之助（1894 年-1989 年）からの寄付で 1960 年に再建されました。門の中央にある象徴的な赤い提灯の高さは 3.9m で幅は 3.3m、そしてその重量は約 700kg です。「雷門」という漢字が正面に書かれ、裏面には「風雷神門」という漢字が書かれています。また、その底部に彫り込まれた手の混んだ龍の彫刻も特筆に値します。外向きには風神と雷神が、そして内向きには龍の尻尾のついた仏様、天龍と金龍の像が提灯の両側に設置されています。三社祭などのイベント開催期間には、この提灯は神輿を運ぶ祭の参加者が通り抜けられるように折りたたまれます。浅草寺の拝観時間の終了後の夜間には照明で照らされます。